「神の国での過越まで」

ルカ 22:14-18

2020.11.29 南与力町教会

序：聖餐式の意義

本日から教会歴ではアドベント（待降節）に入ります。アドベントととはクリスマスを待ち望む期間であると同時に、主イエスの第二の到来、すなわち再臨を待ち望む期間でもあります。

しかしこのアドベントの期間も、引き続きルカによる福音書から御言葉に耳を傾けたいと願っています。ここに記されている主の言葉は、聖餐式について教えていますが、それはアドベントの時を歩み、主の到来を待ち望むべき私たちにとってもふさわしいものだと思います。聖餐式は主イエスの十字架の死を覚え、記念するためのものです。しかし聖餐式の意義はただ過去の出来事を思い起こすということだけではありません。22 章 18 節で主イエスは次のようにおっしゃっています。

「言っておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

「神の国が来るまで」と言われています。聖餐式とは「神の国が来るまで」、その到来を待ち望みつつあずかる食事でもあるのです。

ルカ福音書の聖餐についての言葉は、まず過越の食事についての言葉が 15～16 節にあり、その後一回目の杯の言葉が 17～18 節に記されます。そして 19 節にパンについての言葉、20 節に杯について言葉が記されています。すなわち、食事、杯、パン、杯、と二セット繰り返されていることがわかります。今朝はその前半部分、過越の食事についての言葉と一回目の杯についての言葉を特に学びたいと思っています。

１．神の国で過越が成し遂げられるまで

・主イエスの切なる願い

まず 14 節には「時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった」とあります。「時刻になった」とは「時が来た」と訳すこともできます。22 章 1 節では「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」と言われ、22 章 7 節では「過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た」、そしてこの 14 節でついに「その時が来た」とつながっているわけです。そしてイエス様が食事の席に着き、使徒たちとイエス様と共に座ったのです。ここからいよいよ最後の晩餐(過越の食事)が始まっていくわけですが、まずイエス様は次のようにおっしゃいました。

「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」

この「わたしは切に願っていた」という言葉は非常に強調された言い方です。原文を直訳すると「切望をもって切望していた」となります。同じ意味の言葉が二度繰り返されて強調されているのです。イエス様はご自分が苦しみを受ける前に、弟子たちと共に過越の食事をしたいと切に願っておられたのです。そしてそのためには主イエスの命を狙う敵たちに過越の食事の場所がばれて、邪魔されるわけにはいきませんでした。それゆえにイエス様は敵に場所がばれないよう、周到な仕方で食事の準備をするようペトロとヨハネに命じられたのでした（22:7-13)。

それほどこの過越の食事はイエス様にとって大切なもの、なくてはならないものだったのです。その理由として16節では次のように言われています。
「言っておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」
ここには主イエスがもうすぐ死ぬことになるということが示唆されています。イエス様はご自分が苦しみを受け、殺されてしまう時がもうすぐ来るということをご存知でした。それゆえ死ぬ前に弟子たちと過越の食事を取ることができるのはこれが最後なのです。それゆえにイエス様は最後に弟子たちと共に過越の食事を取ることが切に願われたのです。その意味でこの食事を「最後の晩餐」と呼ぶことはふさわしいことでしょう。しかしイエス様の言葉には「「神の国で過越が成し遂げられるまで」という条件がついています。

・「神の国での過越し」の意味

では「神の国で過越が成し遂げられる」とは一体どういうことでしょうか。ここで言われている「過越」とは15節で「あなたがたと共にこの過越の食事をしたい」と言われていた「過越の食事」のことです。その「過越の食事」が神の国において成し遂げられる。この「成し遂げられる」という言葉は「満たされる、実現される、成就される、全うされる」という意味があります。イエス様は「過越の食事は神の国においてこそ、全うされる、成就される、完全に実現する」と言われているのです。
過越の食事とは、基本的にイスラエルの民がエジプトの国、奴隷の家から救い出されたことを記念し、お祝いするものです。しかし、同時に過越の食事はユダヤ人たちにとって来たるべき神の救いを待ち望むものでもありました。確かにイスラエルはエジプトの国から導き出され、自由の民となりました。しかしその後、イスラエルは神に背いて罪を重ね、北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされ、南ユダもバビロンからの襲撃を受け、捕囚とされてしまいました。そしてイエス様の時代もイスラエルはなお自分たちの国を持つができず、ローマ帝国という異邦人の支配下に置かれていたのです。ですから、ユダヤ人たちは過越祭において、かつてイスラエルをエジプトから救い出してくださった神様の御業を覚え、感謝すると共に、その神様が同じように自分たちを救い出してくださることを待ち望んでいたのです。
その意味ではイエス様が「神の国で過越が成し遂げられる」と言われたこととつながるのだと思います。神の国においてこそ本当の意味で過越が祝われる、救いをお祝いする宴会が行われ、実現する。イエス様はそのことを教えられたわけです。
では神の国での過越祭で祝われる「救い」とはどのようなものでしょうか。ユダヤ人たちが期待していたように、イスラエル民族が異邦人の支配から解放される、ということなのでしょうか。実はそうではありません。
ルカ福音書9章31節には次のような言葉があります。これはイエス様の山上の変貌の場面ですが、そこにモーセとエリヤが現れます。そして「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」。
ここで「最期」と訳されている言葉はギリシャ語で「エクソドス」、脱出を意味する言葉です。そしてこの「エクソドス」とは聖書においては「出エジプト」、すなわちエジプトからの脱出を表わす言葉なのです。イエス様がエルサレムで成し遂げようとしている最期、死とは、「エクソドス」、新しい出エ

ジプトを成し遂げることでもあったのです。それはイエス様の死が、過越の小羊として屠られることであったからです。過越の小羊の犠牲、その血によってイスラエルが災いから過ぎ越され、救われたように、イエス様の犠牲の血によって、神の民は救われ、解放されるのです。ではそれは何からの救い、何からの解放なのでしょうか。それはローマ帝国の支配からの解放ではありません。そうではなく罪の奴隷状態からの解放であり、自由です。イエス様を信じる者は、その血によってすでに罪から解放されている、自由にされている。罪赦されているのです。

しかしそれにも関わらず、イエス様は、過越の食事が完全に成就する、実現するのは、神の国においである、と言われました。このことを考える上でもイスラエルとの類比が役に立ちます。イスラエルは確かにエジプトから脱出し、救われましたが、すぐに約束の地カナンに入ったわけではありませんでした。約束に地に入るまでには、40 年にわたる荒れ野の旅路、そこでの苦しみや試練を経験しなければならなかったのです。これは私たちにも当てはまることです。イエス様を信じる者は、すでにその血によって罪赦され、罪の奴隷状態からは解放されています。しかしまだ約束の地、すなわち「神の国」に入っているわけではないのです。そこに入るまでにはなお多くの苦しみを経なければならないのです（使徒 14:22)。イエス様はそのことをご存知でした。だからこそ、神の国においてこそ過越の食事、救いを喜び祝う食事が完全な意味で実現する、と教えられたわけです。そしてイエス様のそのときには再び弟子たちと共に過越の食事、宴会を味わわれる。ですからこの食事は厳密には最後ではないのです。

・主イエスの誓い

そして杯についての言葉も基本的には同じ趣旨です。17 節 18 節

「そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。言っておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

イエス様はこれまで弟子たちと共に、また罪人と言われる人たちとも一緒に、飲み食いされました。敵対者たちからは『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と悪口を言われたほどです（ルカ 7:34)。また当時ファリサイ派の人々やヨハネの弟子たちとは度々断食をしていましたが、イエス様の弟子たちは断食をしませんでした。そのことを指摘された時、イエス様は次のように答えられました。

「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」（ルカ 5:34-35)

すなわちイエス様にとって弟子たちとの食事、そこでの飲み食いは、婚宴の食事のような喜びに満ちたものだったのです。しかし花婿であるイエス様が奪い去られる時が来る。その時には弟子たちも悲しみ断食することになる、と言われたのです。

確かに弟子たちはイエス様が奪い取られた時、嘆き悲しんだでしょう。断食をしたかもしれません。しかし、イエス様は弟子たちにご自分の死後、断食し続けるように言われたのではありません。むしろイエス様は杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われました。「これを取り、互いに回して飲みなさい」と。しかしイエス様ご自身は「神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してない」と誓われたのです。

これは 16 節で「言っておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない」と言われたことと基本的には同じ意味です。神の国が来るまで、神の国で過越が成就するまで、私は決して過越の食事を食べたり、ぶどう酒を飲んだりはしない、とイエス様は誓われたのです。

このイエス様の誓いにはどのような意味があるのでしょうか。それは単にもうすぐ死ぬから食べたり、飲んだりできなくなる、というだけの意味なのでしょうか。しかしイエス様は死んだままではおられませんでした。復活し、弟子たちの前に現れました。そして一緒に食事をしたことも記されています。しかしそこでぶどう酒を飲んだり、過越の食事のように小羊を食べたりはなさいませんでした。イエス様は「神の国での過越まで」はそれを食べたり、飲んだりしないと誓われたからです。イエス様はその後、天に上られました。イエス様は今もこの誓いを守り、弟子たちと共に神の国で食事をする時を待っておられます。

このようなイエス様の姿は、家で夕食を用意しながら、家族の帰りを待っている人にたとえられるかもしれません。家族が帰って来るまで、夕食を食べずに待っている人がいる。なぜその人はそうするのでしょうか。自分のお腹を満たすことが目的なら待つ必要はありません。先に飲み食いすればよいのです。しかし、待つとすれば、それはその人が家族と一緒に夕食を食べたい、家族と一緒に喜び、楽しみながらごはんを食べたい、飲み食いしたいと願っているからです。

イエス様もそれと同じなのではないでしょうか。イエス様は使徒たちと一緒に過越の食事をすることを切に願っておられました。そうであるならばイエス様は神の国で弟子たちと共に過越の食事を喜びながら食べること、飲み食いすることをやはり切に待ち望んでおられるはずです。さらにイエス様は弟子たちが神の国に入るまで苦しみを経験することをご存知でした。そうでればなおのこと、ご自分だけが先に宴会の食事を食べ、ぶどう酒を飲むことなどイエス様にできない。決してそのようなことはしない。そうしてあなた方と一緒に神の国で宴会の席に着き、飲み食いする日を待ち続けている。そのようなイエス様の決意と願いが今日の御言葉には込められているのだと思います。

最後に

聖餐式は私たちが神の国での宴会を待ち望みつついただく食事です。しかし、わたしたちが待ち望む以上に、イエス様がその時を、待ち望み続けてくださっている。そしてなお苦しみや試練を経験しなければならない私たちのことを主イエスは見守り、助け、私たちのために執り成し祈り続けてくださっているのです。そのことを感謝と喜びをもって覚えたいと思います。